研究課題　中近世山陰西部における曹洞宗寺院の諸関係―石見国妙義寺を中心に―

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　中司健一（益田市歴史文化研究センター・主任）

　所内共同研究者　西田友広

　所外共同研究者　目次謙一（島根県古代文化センター・専門研究員）・福田善子（山口県立美術館・主任学芸員）・濱田恒志（島根県立古代出雲歴史博物館・主任学芸員）・角野広海（島根県立石見美術館・学芸員）

研究の概要

（１）課題の概要

　島根県益田市の曹洞宗妙義寺は、中世以来の歴史を誇り、中世のものも含め豊富な古文書を伝える。それらは一部が『曹洞宗古文書』や『中世益田・益田氏関係史料集』に収録されているが、まだその全体像は示されていない。  
　妙義寺は、中世に益田氏の菩提寺であったこと、中国地方の曹洞宗の中核的な寺院である大寧寺との緊密な関係、末寺である益田市域の多くの曹洞宗寺院との関係、江戸時代における三隅の龍雲寺や津和野藩との末寺の帰属をめぐる問題、一方で広域的な文化交流の様相など、中世・近世における曹洞宗寺院の支配者や他寺院との関係について非常に興味深い事例を多く見いだすことができる。  
　そこで、本共同研究では、妙義寺文書や所蔵する文化財について学際的に調査し、目録化・活字化を進めるとともに、関連する寺院等の文書や文化財もあわせて調査することで研究資源化と、中近世山陰西部における曹洞宗寺院の諸関係、すなわち領主との関係や他寺院との本末関係・文化的交流などについて考察することとしたい。

（２）研究の成果

　妙義寺の釈迦十六羅漢図及びこれに類似する作品の調査を実施し、作品間の関係を検討した。また、釈迦十六羅漢図のもととなった作品についても情報収集と検討を行い、その美術的、美術史的価値を考察した。  
  
妙義寺及び大寧寺の文献調査により、釈迦十六羅漢図が妙義寺に施入された背景や、禅僧間のつながり、その後の妙義寺においてどのような位置づけがなされていたかを検討した。  
  
中世末期に益田氏が大寧寺に寄進したという仏像三体については、写真を見ての所見であるが、一六～一七世紀頃の作か、という評価を得た。大寧寺等の文献では中世の寄進という証拠は得られていない